資料紹介

尊円法親王御詠草三種

解題

尊円法親王（永仁六年～延文元年）は、続千載集入集（二首）を始めとして、御生存中、三集に十二首が撰入された勅撰歌人であつた。[1] 親王の御集としては、「法花経百首」、「貞和二年百首」の二種があり、写本も現在それぞれ数種挙げ得るが、飜刻紹介されたものは、「法花経百首」の写本、二種にとどまつている。[2] 今回発見され、当部に架蔵された、尊円親王御真筆の和歌詠草二種の飜刻紹介に当り、合せて、「貞和二年百首」（江戸初期写、書陵部蔵）を飜刻した。

いうまでもなく尊円親王は、和様筆道・青蓮院流を創始された方である。御履歴を窺えば、[3] 伏見天皇第六皇子に生まれ、母は播磨内侍、三善俊衡の女である。延慶三年、親王宣下、翌年御歳十四で慈深僧正の弟子となられ、名を尊円と改め、天台宗山門・青蓮院門主となられた。又、この頃から世尊寺行房、ついで行尹に書を学ばれている。元弘元年、天台座主に任ぜられ、以後座主を三度務められ、晩年には四天王寺別当にもなられた。歌人としての親王は、御詠草の加点者にも見られる如く、一派に囚われず、その歌風は、率直、平明、かつ多数の釈教歌に特色を持ち、中世和歌史に特異な地位を占められている。御著書に、御集の外、「入木道口伝抄」「門葉記」等がある。

なお蛇足ではあるが、新資料は、数少ない親王御筆の中でも、取分その仮名の今日伝わるもの少い中にあつて珍らしく、更に書巻として伝承されたものは今日までなく、貴重である。又、青蓮院流創始過程にあつた親王の初期の御筆として、書道史上、得がたい唯一の資料である。

解題一、詠五十首和歌

本項と次項の「詠三十首和歌」は、現在一巻に仕立てられている。原初は別個の御詠草であつたが、両者の酷似した書風から考え、成立後まもなく親王御自身の手によつて一巻にまとめられたものと考えられる。現存の表紙は題簽、外題ともになく、後世のものである。軸高三十三糎、本紙の長さ五十糎～五十二糎、墨付五枚、本文用紙は鳥の子紙。本文和歌二行書き。巻頭は「詠五十首和歌尊円」とあり、末尾に頓覚（俗名小倉公雄、生没不詳、続古今以下勅撰集に百六首入集）の加点した旨の識語がある。御詠草は、四季、恋、旅、山家のもとに五十首から成る。頓覚は、

うち十二首に加点し、その内の一首に添削一カ所書き込んでいる。なお第四十一首は続千載集（雑）入集歌である。

申すまでもなく、御詠草は、親王御自身がそれまでの御草稿から分類、書写され、頓覚に点を乞われた歌巻であるが、成立年次を知るべき記録はない。ただ推定できることは、尊円親王の御事歴から窺い、御詠草の書風がまだ世尊寺流の顕著な書風で、行房、行尹に就いて学ばれていた頃、親王廿歳頃の筆である事。かつ続千載入集歌の存在からして、同集の成立、元応二年以前という事は確かである。

解題二、詠三十首和歌

御詠草は、四季、雑、釈教、神祇、祝の三十首から成る。墨付三枚。軸高その他前項に同じ。巻末に為世（建長三年～延元三年、新後撰、続千載集撰者）の加点した旨の識語がある。為世は五首、五カ所にわたつて添削し、一カ所歌中の歌語についての批評を註記している。御詠草の成立は、巻中「伏見院かくれさせ給てのち」との詞書をもつ歌があるので、文保元年、十一月以降は間違いなく、[5] 書風から「詠五十首和歌」と同年次の成立と見てよいのではないかと思う。

なお為世の識語の奥に、継紙にて

此一巻尊円親王真翰無疑者也
黙者頓覚小倉中納言公雄卿法名頓覚……
冷泉前中納言為相卿
二条前大納言為世卿
右一覧之次染筆了　　堯空（花押）印

と三条西実隆の加証奥書があり、これに依ると、元は頓覚、為相、為世の三人の加点を持つた三部から成る詠草であつた事がわかる。しかし為相の加点したといわれる詠草は現在不明である。実隆の署名から考え、[6] 永正年間以降室町末期は三部だつたものが、現附属資料の極札等から考え、[7] 江戸中期には既に一部脱落していたと思われる。

解題三、貞和二年百首　東山天皇御宸筆

大きさ縦二八糎、横二十糎、袋とじ、一冊、外題は無地の題簽に、桜町天皇御宸筆で、「尊円親王百首」とある。本文用紙は斐紙。歌は二行書き。奥書は本文同筆で、「貞和二年之百首也」とのみ。諸本は、他に高松宮家蔵本（江戸中期写、一冊）あるのみである。同本は書陵部本の写しで、両本に異同は全くない。御集の成立は、奥書に「貞和二年」とあり、又、本御集から採られた勅撰歌の詞書にも、「貞和二年百首のうた召されしとき」、或は「貞和二年百首の歌奉りける時」等となつているので、貞和二年十月[8]の成立は問題ないと思う。百首のうち、虫損の為十七首が一部欠けたまま書写されている。[9] なお本集からの勅撰集入集歌は全部で十九首である。

註

（1）尊円親王の全勅撰集入撰歌は四十二首である。
（2）築瀬一雄編「碧沖洞叢書第十四輯」参照。
（3）「天台座主記」、「入木道口伝抄」の抜文、進藤為証の「尊円親王御伝略」等参照。

(4) 陽明文庫に書状一幅あるのみである。
(5) 文保元年九月伏見院崩御。
(6) 永正十三年実隆落飾、天文六年没
(7) 了佐、了珉（貞享二年）の極札、了仲の折紙（宝永九年）はあるが為相が加点した詠草についての折紙等はない。
(8) なお円太暦によれば、貞和二年十月光厳上皇が風雅集埃集のため、尊円親王を始め、時の歌人に各百首命じ集めさせられたとある。
(9) 翻刻文において、うち三首は勅撰集によって補った。

尊円法親王御詠草三種飜刻文凡例

一、底本の漢字は全て当用漢字体に改めた。
一、原文中親王御自身書き改められた所は元の文字をその横に書き×印を附した。
一、（ ）中の文字は筆者の書き入れである。
一、勅撰集との異同は前項にしたがい書き入れた。
一、その他の書き込みは為世ら加点者のそれである。

（森　県）

詠五十首和歌

尊　円

春

たちまよふかすみの色もほの〳〵と　しつかにあくる春の空かな
あけほのやなみちの霞とたえして　島見えそむるたこのうら風
〳〵うき身にはそよなる春をなにとたゝ　なきてつくらむやとの鶯
うつしうへて我ともとするくれ竹に　なれもかたらふうくひすのこゑ
むめのはな色かもしらぬすみそめの　たもとにおしき春のゆふかせ
ゆふくれの窓しつかなるはるさめに　にほひもしめるやとのむめか枝
〳〵いそかるゝみやこはあすになるとても　花にはこえしあふさかの関
おほろよのはるのならひもわきてなを　はなの木のまにかすむ月かけ
あらしふくたかまの山のあけほのに　雲にわかれてちるさくらかな
はつせ山はなはあとなくちりはてゝ』　おのへのかねに春そくれ行

夏

きゝてしもさらにそおもふほとゝきす　なかすはいかにむらさめの空
〳〵さと人のねさめとひてやほとゝきす　山ちにかへるけさの一声
しけりあふ木のまをわけて夏のよの　月ふきおろすもりのした風
あやにくにかけさへそひてなつむしの　おもひはけたぬよはのいけ水
山かけやまつのした水むすふてに　すゝしさあかぬ夏のひくらし

秋

みやきのやよはの秋風つゆふけは　はきのうはゝにきゆる月かけ
月たにもひとりみやさはさひしきを（×に）　いかにせよとてしかのなくらむ
ふかくさやあきかせさむみ里あれて　むなしきとこにうつらなくなり
なかき夜の月みるほとにきえにけり　かへにそむくるあきのともし火
〳〵ゆふしほのさすかにをよふ浪はなく　月こそこゆれすゑのまつ山
〳〵きよみかたとまるせきちのならひとも　しらてや月のかたふきぬらん
夜をこむるせき地の鳥にあさたちて』　霧こえまよふあふさかの山
なか月や時雨はいまたさそひこて　たゝうきくものはれくもるころ

〻むさしの〻すゑまて人やわけつらむ　あきもはてある長月のくれ
こよひまたあけなは冬のはつしくれ　さもさためなくうつるときかな

冬

物おもふ袖にそのこるゆふしくれ　しくる〻雲はよそにはれても
露きえしおはなか袖の霜のうへに　やとりかねたる冬の夜の月
〻さそへとも友やつれなきさよ千鳥　こゑもふけゐのうらみてそなく
ふる雪をつま木のうへに吹しきて　嵐やおもきおの〻さと人
おしやけにうらちの雪のいたつらに　ふれとたまらす浪にきえゆく

恋

しのひかねよしやとおもふをりしあれは　わか心にもこ〻ろをそをく
さてもなをくちぬおもひはある物を　人こそしらねたにのむもれ木
われなからはかなやこ〻ろいつまてか　つれなき人をさのみしたはむ
くちはつる袖のなこりをわするなよ　やとりなれてもいくあきの月』
〻まてはこそつれなさもそへなか〳〵に　いつとちきらて人のとへかし

旅

かねてよりやとやさためしゆふくれの　煙をとはてすくるたひ人
あきふかき草葉のつゆに袖なれて　むしのねわたる野への旅人
〻たちこむるきりのあけくれ道見えす　入ぬる月のあとの山こえ
あまた夜のたひねのとこになれぬれは　夢より後そ鳥はなきける
露ふかき山わけ衣そてほさて　なみちにかゝるあきのたひ人

山家

山さとのさひしさをたにしのはすは　をき所なき我身ならまし
おく山のまつのとほそにひとはこす　ゆふゐるくもの影はかりして
〻山ふかみいはまをつたふ水のをとに　おもひしよりもすむ心かな
身はかくてなをかけかくす山さとに　すまぬ心よいつくにかゆく
山ふかみ雲のとちたるまつの戸を　風にひらきて月そさし入
きくもうしきかてもさひし山さとの　松ふくかせを我いかにせん
〻とはるへきひとなき山のまつのかと』　さ〻ぬをたゝくみねの木から

し

おほつかなとふ人もなきやまさとの　まつにあらしのなにこたふらむ
〻さひしとはしはしそき〻し山さとに　なるれはなる〻まつのあらしそ
山さとになれにける身もあはれなり　まつふくかせに夢むすふまで

僻案愚点十二首

頓覚』

春

たちこむるみねのかすみのあけほのに　むら雲はやきをちのやまかせ
〻あけほのやなみちのかすみ中たえて　しま見えそむるたこのうらかせ
うつしうへてわかともとするくれたけに　なれもかたふうくひすのこ

ゑ

ちらてこそにほひもあれはむめのはな　もろきにつけていとふ春風
〻もえいつるすそのゝわらひをりそへて　つま木やおもきはるの山人
花のみやうき身わすれぬともならむ　いのちのうちのはるをちきりて

見し人もいまはこすゑのはなさくら　ちりしく雪に跡そたえぬれ

夏

さみたれのはれまのよはのほとゝきす　月めつらしきねをや鳴らん

こと色もましらぬ野辺のなつくさに　花めつらしくさけるなてしこ

〻はれやらぬおなしなかめにくもとちて』　いくかになりぬさみたれの

空

秋

〻ものおもふ身にはならひのそてのうへに　あまる涙やあきのしら露

ふけゆけは木のしたつゆもあらはれぬ　やゝすみのほる月のひかりに

むさしのや露のよすかのあきはきの　花のしたみちわけそわひぬる

木のまもるこゝろつくしのあきのいろに　これもかはらぬむらくもの

月

〻月たにもひとりみやまはさひしきを　いかにせよとてしかのなくらむ

しつかなるねさめのよはのしかのねに　なにとはなくてぬるゝそてか

な

あれまさるあさちかにはゝあきふけて　さむけき露や霜いそくらむ

あきふけ」てと申詞夜の外には」不可侵

冬

かれのこるおかへのすゝきまねけとも　すきにしあきはたちもかへら

す

うつもるゝうき身世にふるみちたえて　雪もうれへもふかきやまさと

山かけのふかきいはまにうちよせて　かへらぬなみのこほるたに川

雑

おく山のまつのとほそにひとはこて　ふもとにしつむとりの一こゑ』

ものおもふこゝろにすめるよはの月あき　にもかゝる色やなかめし

伏見院かくれさせ給てのち

色ふかきうれへのそてにくらふれは　木の葉つれなきはつしくれかな

〻すみそめはいまさしならぬ色なから　かた身かなしきふちころもかな

袖のうへになみかけよとやふちころも　うきにしもきるならひなるら

ん

方便品　無数諸法門其実為一乗

なかめかふるちさとのほかのいゑ〳〵の光は　おなし秋の月

人記品　世尊恵燈明我聞授記者

うれしさよふけもさためぬわかみちの　ゆくすゑてらすともしひのか

け

普門品　三十三身

さきましるはなをもらさすかけとめて　のはらの露そあまた色なる

神祇

〻をひの山ふもとのちりにやはらくる　神の光そわきてあまねき

祝

〻君か代はなからのやまの名もふりす　てらす日よしの神のめくみに

僻案点八首　為世』

詠百首和歌　　青蓮院入道二品親王尊円

春歌

さほ姫のかすみのころもうちはへて　袂ゆたかに春は来にけり
新千載　いまもなおわかたつ杣の朝かすみ　世におほふへき袖かとそみる
新千載九　志賀のうらや浜松かえの春の色を　そらにふかめてたつ霜かな
千代ふへき君か子日のはることに　虫損　えの松は尽せし
虫損　のきの竹の雪おれに　虫損　あれぬと鶯そなく
春日野は雪もけなくに里人の　わかなつみにと何いそくらむ
うち出し波のはつ花風さえて　ふたゝひこほる谷河の水
梅のはなうつるもふかき袖の香を　おりはやつさて家つとにせむ
梅かえはかすみにこめて春の夜の　月影にほふ軒の下かせ
かくしつゝつもれは老の春をへて　なおかすみそふ月のかけかな
行とりの名残もとをくしたはれて』　こゝろにかゝるこしのしらくも
花をまつよし野の里の春の色に　山のたかねやまつかすむらん
吹やらぬ花にこゝろをつくはねの　このもかのもに行かへりつゝ
年へぬる志賀の都の花のいろは　たか見し世よりこゝろそめけむ
やすみしる君かはこやの山さくら　かせおさまれる春そ久しき
風雅　桜花うつろふ色はゆきとのみ　(ふるの)山風ふかすもあらなむ
虫損　山ときはいつともいはつゝし』　いはねとしるき春のくれか
な
新続古今　玉河のなみにおらるゝやまふきを　われにもゆるせ井手の里人
池水にまさるみかさはなけれとも　花なみこゆる庭の松か枝
くれてゆく春の名残はおほよとの　うらみもあへすかへなみかな

夏

夏ころも今朝きてみれは山姫の　かすみのそてに立かへりけり
夘花のさけるかきほのひまをあらみ　春のとなりはへたつともなし
しのひねもことはりすきてほとゝきす』　ほのかにたにもきかぬころ
かな
むらさめの雲まのそらのほと々きす　声もたえ〳〵鳴わたるかな
鵜舟さす夜河のかゝりさてもなを　のちの世まてもやみはてらさし
年をへてあつむる窓のほたるにも　おひとなる身のかけそしらるゝ
一むらとしはし見えつるうき雲の　虫損　みち行ゆふたちの空
虫損　き山井の清水むすふ手に　すゝしさあかぬ夏の夜の月
そともなるならの葉そよき吹かせは　秋にいくらもかはらさりけり
みそき河なかれもやらぬあけの葉の　あさせは水の音むせふなり

秋歌

新続古今　秋来ぬとゆふつけ鳥のなくなへに　今朝やたつたの山の下かせ
おもひやるなかれも久しあまの河　けふのあふ瀬の水のみなかみ
あまのかはわたせの舟のつなてなは　まれなる中のためしにそひく
花すゝきほむけの糸にぬきとめて　ちるともみえぬ露のしらたま』
秋の色はみえけるものをしらつゆの　むすふときはの杜のした草
うつり行衣こそあらめ秋はきの　下葉もなとか色かはるらむ

いほりさす秋の山田のひたすらに　いとひははてさをしかのこゑ（本ノコマ）
分いれはしはしとたゆるむしのねに　虫損　そやらね野へのかよひ路
虫損　のたえまみゆるひとつらや　かきのこしたる鴈の王章
里はあれて住人もなきふかくさの　野へのあるしとうつらなくなり』
和田のはらやそしまとをくてる月を　人にかたらむことのはもかな
よしさらはこゝろにまゝにあくかれん（の歟）　関のとさゝぬ御代の月かけ
をく露はあたのおほのゝ秋のせに　やとりもあへぬ月のかけかな
住なるゝとやまのいほの夜半の月　なおおもひいるしるともなれ（へ歟）
かくてこそみるへかりけれおくやまの　むろのとほそにすめる月かけ（風雅雑上）
袖ぬらす浦はのなみのよる〳〵は　たれまつしまに衣うつらむ』
しくれ行雲の八重たつおく山の　いはかきもみち色まさるらし
露しもをたてぬきして錦織　しつはた山のみねのもみちは
わきてなお久しくにほへなが月や　かさなる秋のしら菊のはな
したはるゝ秋の行衛をいつかたの　虫損　としりてなかめやらまし

冬歌

初霜のをかのかやはらいつのまに　あきみし露のむすひかふらん（新千載冬）
朝嵐にたゝよふ雲のそのまゝに』　やかてしくるゝ神無月かな
露にたにうちかれそめしあさちはら　くちぬはかりもをける霜かな
和歌の浦に年へてまよふはま千鳥　おひのなみさへよるとなくなり
あしろ木にせかるゝ水やこほるらむ　をとこそよはれ宇治の河波（新後拾遺）
今朝はまつよもの山のは雲はれて　みやこのほかも雪をみるかな
さゝ波やしかの山越ゆきふかし　ふるさと人や道まよふらむ
かりころもかた野われ行そてさえて』　あまのかは風雪はらふなり
すみかまの煙のすゑはみえわかて　尾上はるかに雲そたなひく
過きつる五十のくれの程なきを　（更）にをとろく年のくれかな（夢）（新後拾遺）

恋歌

おもひたつ今よりやかてくるしきは　いかにさかしき恋ちなるらむ
あちきなくまつそてまてはゆるさはや　人めすあまるなみたならすは
としをへぬこゝろのうちのしのふやま　人めをよくるみちたとるま
に』
せきかへすたもとにあまるなみた河　うき名もさこそ世々なかるらめ
逢事はかたゝの浦にすむあまの　しほたれなくに袖はぬれつゝ
逢事にかへむとおもふたまのをの　たえぬはかりやたのみなるらん（新続古今恋二）
いかにせむうき中河の瀬をはやみ　あた浪のけてぬるゝたもとを
ふけぬともなをこそまため我たにも　いひし契りをいかゝわすれむ（新続古今恋三）
初鴈のつはさにかけぬたまつさの　かよふみちなきねこそなかるれ』
行末はわかこゝろたにしられぬを　なかきちきりといかゝたのまむ
虫損　ふくにえやはたのまん契りしも　虫損　はかりの月日へにけり
（空白）　おとろかさはやたのめしを　人こそ夢になしはつとも
吹風になひくをしらてつれなしと　なにうらみけむあふの松原
逢坂の関のこなたの一夜たに　あかしもはてす鳥やなくらむ
待えては千夜もとなけくかひもなく　さらぬわかれのあり明のそら』

新続古今恋二
うき中をかけていのらむ神しまや　いそまの酒の波のしらゆふ
うき人はおなしそらなる月みても　おもひ出しをおもひいてつゝ
たちかへりとはるゝ人こそわきかぬる　たかこゝろよりそとくなくら
む
ことの葉のをよはぬまゝにつらしとも　うしともいかてすくすこゝろ
かは
新千載（新後拾遺の誤り）
身のうさをしらすはいかゝ（空白）なを　こゝろのまゝにうらみはて
まし
賀歌
いまは身のふりぬるしもにをとさえて』　ねさめさひしき暁のかね
君か代ははやむかしに（空白）かつゝ山　ふるきしほりの跡をたつねて
虫損　けしすへもひとつになかれきて　いとゝたえせし谷川の水
嵐ふくゆふへはつらしおく山の　松をもともとなにたのみけむ
風雅雑下
百敷や砌のたけのふしておもひ　をきていのるも我君のため
ともにこそ久しかるらめたつのゐる　はまのまさこもいはとなるなり
新続古今雑
こゝろこそ猶もすみえぬやまさとに』　身をかくさはとなにおもひけ
む
同
いつかたに世をのかれまし山里に　つらきところと松風そふく
統古今旅
くれかゝる山の下みちわけゆけは　雲こそかへれあふ人はなし
露はらふかりねのとこのたひまくら　いやはかなくる夜半の夢かな
新千載
わたのはらもろこしまても行舟に　波しつかなる代とそしるらむ
まつりことなをもみかけと玉くしけ　ふた心なく世をいのるかな
年をへてもろく成行なみたかな』　老こそ人のうきせなりけれ
思ひいつるきのふのゆめのかすゝは　むかしみし世のうつゝ也けり
はるかなる暁かけてかゝけはや　虫損　ともなき法のともしひ
つた　虫損　露ももらさぬ瓶の水　たえすや世々の人にいのらむ
久かたの雲もわか身のよそならて　月はこゝろのうちにこそすめ
くもりなきあまつ日吉の影にゐて　あくまて身をもてらしつるかな
新千載
君か代にゆきあひの霜の年ふりて』　千たひもつくすちきのかたそき
千早振あまつ国津のもろ神の　はひを君かよはひにもせむ